

## 2 終戦の概況

八月九日、突如「ソ」連参戦の事懸動するや、大本營は之に対処する為、才十七方面軍の主敵を「ソ」軍とする如く決し、八月十日午前六時を期し、全方面軍を関東軍の戦闘序列に入らしめ、次いで、関東軍は、上述の如く「北鮮」の才三十四軍を才十七方面軍の指揮下に入らしめると共に、才百二十師団を直轄として平壤附近に集結せしめる如く命令した。

かくて才十七方面軍は、依然、済州島並南部沿岸に於ける対米防禦の措置を講じつつ、主力を以て、取敢えず北面して対「ソ」作戦の為、対応措置に統帥を強動せんとした時、運命の八月十五日を迎えることとなつた。

終戦時に於ける朝鮮方面の兵團配置並兵力の概要は左記の如くであつた。

才十七方面軍（朝鮮軍管区）

（東 城）

0077

才五十八軍

(濟州島)

才九十六師團

( )

才百一十一師團

( )

才百二十一師團

( )

獨立混成才百八旅團

( )

才百二十師團

(京城)

才百五十師團

(井邑 (光州北方))

才百六十師團

(裡里 (群山東方))

才三百二十師團

(京城)

獨立混成才百二十七旅團

(釜山)

才三十團軍 (才十七方團軍指揮下)

(咸興)

才五十九師團

( )

才百三十七師團

(定平 (咸興南方))

獨立混成才百三十三旅團

(新東)

才十七方面軍は、以上の如く、八月十日以来関東軍の戦闘序列に入つた為、終戦に伴う積極作戦の中止、停戦交渉成立迄の間に於ける止むを得ざる場合以外の戦闘行動の停止等は、凡て、関東軍命令によつて律せられたが、全方面軍は、八月二十二日附大體命令一三八八号によつて、八月二十五日零時以後関東軍の戦闘序列より脱せしめられ、但し、「ソ」軍に対する停戦に関しては関東軍總司令官の指揮を受ける如くせられた。

右は、二十日マニラに於て手交せられた連合軍の指令才一号（九月二日、降伏文書圖印と共に公布せらるべき陸海軍一般命令才一号）に於て、降伏に關し、朝鮮は、北緯三十八度線を境界として、以北は「ソ」軍の、以南は米陸軍最高指揮官の各管轄とせられた為、之に關し、前送大體命令才千三百八十八号により、八月二十五日午前零時を以て、方面軍の作戦任務の解除並一切の武力行使の停止が併せ命ぜられた。

0079

朝鮮時 並 其の直層の執議は南北に於て著しくその様相を異にし  
定。

日本がポツダム宣言を受諾した時、「ソ」軍は疾風掃葉を著く勢を以  
て、水滸峯方面より北鮮に進入すると共に、一方、雄基・羅津 及  
清津附近に上陸し、隨所に所在の日本軍を圧倒し、京城には十数時間  
で南下し得る態勢をとつたが、他方、米軍は、最も近い處で沖繩に到  
達し得たに過ぎなかつた。

茲に於て、米國の首腦は、日本の終戦直前、朝鮮を北緯三十八度線を  
以て二分し、此の線迄は、「ソ」軍の南下を認め、且つ、此の線を以  
て、「ソ」米兩軍が夫々日本軍の武装を解除し、且つ、日本<sup>の</sup>軍實民を  
送還し、以て、日本勢力を一掃せんとする分懸線たらしめんとし、「ソ」  
側の同意を得、一般命令第一号によつて之を規定することとしたので  
あつた。

0080